

山口県 地域医療の風だより

Yamaguchi Community Medicine News

地域医療の現場より

柳井市平郡診療所
所長 片山寛之先生に聞く

6年間しっかり医学の勉強をして…その後は？
医学生から医師への道のり

やまぐち地域医療セミナー2016 in 岩国
地域医療に従事する医師を志す方への支援制度

「医師になりたい」
という気持ちを忘れずに、
初心を糧にして欲しい



山口県 地域医療の風だより

No. 16 平成 29 年 3 月号

目次

- ◆ 地域医療の現場より
柳井市平郡診療所 所長 片山寛之先生に聞く 2
- ◆ 「やまぐち地域医療セミナー2016 in 岩国」開催！ 7
- ◆ 「6年間しっかり医学の勉強をして…その後は？」
医学生から医師への道のり 9
- ◆ 県からのお知らせ
 - ◇ 医師確保総合情報サイト「やまぐちドクターネット」 12
 - ◇ 地域医療に従事する医師を志す方への支援制度を設けています！ 12
 - ◇ 「山口県地域医療の風だより」継続発送の御案内 14

表紙

ことば 「医師になりたい」という気持ちを忘れずに、初心を糧にして欲しい
(柳井市平郡診療所 所長 片山寛之先生へのインタビューから)

写 真 柳井市平郡島 西集落

平郡島は東西の集落併せて人口約370人、架橋されていない島としては山口県内最大の島で、かつては3,000人近い人口がいました。

柳井港とは片道1時間40分のフェリーが1日2往復運航されています。

東西の集落はそれぞれ、紀伊・伊予から移ってきた武士の一族が作ったものと言われています。(諸説あります)

山口県内の島は殆ど「〇〇しま(じま)」と読みますが、平郡島のみ「へいぐんとう」と読まれています。

地域医療の現場より

第16回



柳井市
平郡診療所
片山寛之所長
Hiroyuki Katayama

第16回の「地域医療の現場より」では、平成27年4月から、瀬戸内海の離島、平郡島で診療所長を務められている片山先生に、医師を志してから現在までのお話をお伺いしました。

真剣かつ自然体で朗らかに地域医療と向き合う姿が窺え、自ら学びつつ、後進への気配りも感じられるお話でした。



柳井市平郡診療所西出張診療所

片山寛之（かたやまひろゆき）先生プロフィール

山口県下関市豊浦町生まれ。温泉の街、川棚で育ち、市内（当時は豊浦郡）の高校進学を経て、自治医科大学で学ぶ。

平成14年3月 県立豊北高校卒業
平成22年3月 自治医科大学卒業
平成22年4月 県立総合医療センター
平成24年4月 周防大島町立東和病院
平成26年4月 県立総合医療センター
平成27年4月 柳井市平郡診療所 兼 平郡西出張診療所 現職

一片山先生が、医師になろうと思ったきっかけは何でしたか。

子どものころは特に医師になりたいという気持ちがあったわけではなく、進学についても深く意識はしていませんでした。

県立の普通科高校に進みましたが、高校1年生のときに入院し、病院でお世話になる中で医療に携わるということを意識し始めました。

医療に携わる仕事には色々ありますが、どうせ目指すなら、という感覚で医師を志望するようになりました。

—その中でも、へき地における医療に携わる自治医科大学を志望されたのには、どのような経緯があったのでしょうか。



(上) 朗らかな片山先生・診察室にて (下) 高台の神社から見渡す平郡島西集落 中央奥には本土行きフェリーが見える

高校時代の教頭先生の御親戚が自治医科大学に入学した、という話を耳にして、どんな大学だろうと関心を持ったのが最初です。

—へき地医療について意識されていたと。

いえ、それが全然（笑）。将来の勤務により学費が免除される、ということで、親孝行になるかなという感じで。

—では、自治医科大学に入学して「思っていたのと違う」と感じたりすることもあったのでしょうか。

それはなかったですね。医師になるための医学教育が行われる、という点では同じだと思います。

自治医科大学時代に、へき地医療について意



識したのは、夏に山口県内で行われた地域医療実習からですね。現在は、「地域医療セミナー」として、毎年、自治医科大学以外にも、山口大学や看護学生と合同で行われている実習です。



一片山先生はこれまで、地域の中核病院、小規模病院、そして離島の診療所とそれぞれ異なる医療機関で勤務されてきました。

過去に勤務してきた病院と、離島の診療所の仕事ではどんな違いがありますか。

やはり、離島だと、医師がひとりということ、急変など緊急時の対応には限界があります。なので、まずはそういった緊急の事態を招かないよう、普段の診療においても、予防に力を入れています。

もちろん、緊急時のために、患者搬送のチャーター船等との連携体制もありますが、やはりそうならないのが望ましいですね。

それから、病院と診療所の違いとして大きいのは、診療所での医師は、医療機関の責任者であることですね。診療所の設置者である市役所との色々な調整や、診療所スタッフの負担への配慮も必要です。

—患者さんとの関わりも病院とは異なりますか。

高齢の方が多く、定期的に来られるので、患者さんとの距離は近いですね。

患者さんと接して行く中で、治療や予防がうまくできていくことに、やりがいを感じます。

中にはコミュニケーションが取りにくい患者さんもいるので、苦労もありますが、そういった場合でも、改善に繋がるとやはり嬉しいものです。

—先生は朗らかで、コミュニケーション力は高そ

うにお見受けしますが、それでも苦労されますか。

話を聞いてくれない方も中にはいますよ（笑）。患者さんと医師の間には相性もありますから、気長にお付き合いして、自分だけでは何とも出来ない場合でも、引き続き派遣される医師による治療との継続で、いい方向に向かえばいい。そのときだけ良いのではなく、長い目で見た「継続性」が大事だと思います。

—離島での生活はいかがでしょう。

島から本土に行ったら、生活必需品の買い出しが必須ですね。今は生協の配送を利用しているので、そこまで苦労していませんが、過去に着任された先生はクーラーボックスを持って買い出しに行っていたそうです。

昔と違って、今は生活必需品以外のものも、Amazonなどのネット通販が使えるので、自宅に居ながらにして入手できますよ。

オフの日は、本土に行くこともあれば、島にいることもありますね。子どもが7か月と小さいので、島でゆっくりしながら子どもの相手をしていることが多いかな（笑）。

—離島唯一の医師ということで、診療に当たって困ることはありますか。

診療の方針や対応を考えるに当たり、迷ったりすることはあります。

しかし、今は「家庭医療専門研修プログラム」に参加しており、県立総合医療センターの指導医が毎週のカンファレンスで助言をしてくれるので、困ることはないですね。

このカンファレンスは、インターネットのSkype（テレビ電話サービス）を通じて行われ、電子カルテのデータをお互いに参照しながら話し合ったりできます。

また、診療所の看護師さんがしっかりしていて、介護のケアマネージャーや緊急時の患者搬送船との連携に当たって、たいへん助けられています。

—「家庭医療専門研修」というと、日本プライマリ・ケア連合学会が認定する「家庭医療専門医」の資格を取得できる研修制度ですね（平成30年

度からは日本専門医機構が認定する「総合診療専門医」制度に移行の予定)。こういった経緯で参加されることになったのですか。

臨床研修が終わって、過疎地域の病院で勤務する中で、小児科にも興味を持っていたんですが、当時、一緒に勤務していた先輩医師がこの「家庭医療専門研修」にエントリーしていたことから、関心を持ちました。

その先輩医師が、他の医師や他の専門職と上手に連携して仕事を進めている姿に影響されたかかもしれません。「頼り上手」とでもいいですか(笑)。

実際に、研修で求められる内容や指導は、診療現場のニーズに合ったもので、へき地医療において必要なことがうまく出来るようになったように思います。



西出張診療所の待合室には前号の政井先生が勤務されていた頃の作品が飾ってあります



診療所スタッフの皆さんと

—今、片山先生が目指していること、今後の抱負などはいかがでしょう。

まずは現在エントリーしている「家庭医療専門医」の資格を取得することですね。

資格を取得するだけでなく、その後は、家庭医療、総合医療に関心を持つ後進の育成にも携わっていきたいと思います。

—今回のインタビュー記事を読んで医師になられた方を、将来、片山先生が指導に当たることがあるかもしれませんね。

それでは、最後に、これから医療の仕事に携わりたい高校生や医学生へのメッセージをお願いします。

途中で、最初の気持ちと違うことを考えることもあるかもしれませんが、「医師になりたい、何々になりたい」という気持ちを忘れずに、初心を糧にしていって欲しいと思います。

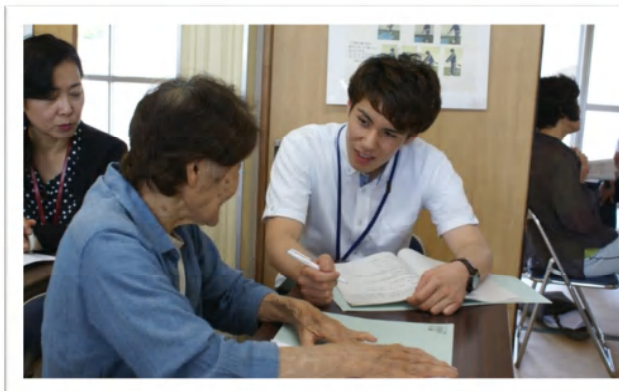
—ありがとうございます。先生の今後ますますの御活躍を期待しています！

「やまぐち地域医療セミナー2016 in 岩国」開催！

学生時代に地域医療の現場に触れる、その経験は長い医療人としての人生で必ず生きてきます。

平成28年8月18日から20日にかけて、岩国市の離島から街なか、山間部までを通して「やまぐち地域医療セミナー2016 in 岩国」は開催されました。

このセミナーは、地域医療を体験し地域の生活環境を実感することで、医学生及び看護学生における地域医療マインドを高め、地域医療の分かる医療人の育成を目的としたもので、自治医科大学と山口大学の両大学の学生が合同で行うようになり、7年目となっています。昨年度からは地元の看護学校や県立大学の看護学生も参加するようになり、一層の幅広さを増しています。



今回の参加者は過去最高の37人となり、4病院、5診療所、2保健センター、5訪問看護ステーションのほか、消防署やグループホーム等、医療や関連する現場に触れる機会となりました。



初日のオリエンテーションではまだまだ緊張していた参加学生の皆さんも、ランチや移動の時間で次第に打ち解けている様子でした。

少人数のグループで訪れた各研修施設（病院や診療所、訪問看護ステーション等）では、診療現場や施設の見学に加えて、実際の患者やスタッフへの聞き取り等で、現場でしか聞けない声に触れていました。中には、消防署やグループホームでの研修に行ったグループもありました。

今回は「Meet the Expert」と称して、「地域に学ぶ」をテーマに、錦帯橋架け替え工事に棟梁として携わった中村雅一さん、医学部卒業後、NPOを立ち上げ、地域の健康づくりに携わってきた長谷亮佑さんの講話があり、幅広い分野での見識に触れる場にもなりました。

参加型の充実したセミナーである本セミナーでは、グループでの課題検討もあり、実習で出会った患者やスタッフについての発表などのユニークな課題や、「地域医療の課題を考える」テーマでのグループ検討もありました。



そして夜のフランクな意見交換会では、参加学生の皆さんが、山口大学医学部や自治医科大学の教員や卒業医師、県内の医療・行政関係者等を交え、大いに親睦を深めました。これには、なんと岩国市長さんも参加され、参加学生と楽しくお話されていました！



療や訪問看護、医療従事者不足など、様々な課題について考えるきっかけとなったという声が多く聞かれました。中には、このセミナーで知り合った学生同士が他のイベントに参加したり、スタッフとして携わったりと、セミナーや学校を超えた広がりも見せています。



最終日には、実習を振り返り、今回のセミナーの場となった岩国地域について課題や魅力、学生ができること等についてディスカッションが行われ、セミナーを終えた学生からは、医療従事者の繋がりや患者とのコミュニケーション、在宅医

次回は、平成29年の夏に、長門市での開催を予定しています。少しでも「面白そうだな」と思った医学生・看護学生の皆さん、ぜひお気軽に御参加ください！！



「6年間しっかり医学の勉強をして…その後は？」

◆ 医学生から医師への道のり

医学部低学年で、生理学や解剖学から専門教育が始まり、座学のほか、数々の実習や試験を経て、それからどうなるんだろう。知っているようで知らない、大学を卒業したての若手医師はどうやって医師の世界に飛び込んでいくのか。

この記事では、医師国家試験から若手医師時代までの大まかな道のりを御紹介します！

(あくまで目安であり、個人の選択や制度・仕組みの変更により、異なることがありますので御注意ください。)

医師国家試験

学業に部活動にアルバイトに…力を入れるところは人それぞれかもしれませんが、医学生なら通る道、医師国家試験・通称「国試(こくし)」。

毎年2月上～中旬に、全国12会場で実施されている試験で、マークシート問題500問を土曜日から月曜日にかけての3日間(正味15時間以上!)で回答するというハードなもので、合格率は約9割。「9割合格するなら、資格試験としては易しくない?」と思うかもしれませんが、受験者は全員、医学部で高レベルの勉強をし、試験をくぐり抜けてきた猛者たちです。大学によっては、ある程度の学力がないと留年などで国試を受けるに至らない場合も。医学部の進級は近年厳しくなっているとも言われていますので、入学後も学業をおろそかにしないようにしましょう!

(実際の出題の例)

- 我が国における食物依存性運動誘発アナフィラキシーの原因として頻度が高いのはどれか。2つ選べ。

a 甲殻類 b 牛乳 c 小麦
d 大豆 e 卵

- 65歳の男性。腹部膨満感と、怠感とを主訴に来院した。3か月前から腹部膨満感と、怠感とを自覚するようになり徐々に増強してきたため受診した。眼瞼結膜は貧血様である。右季肋下に肝を3cm、左季肋下に脾を10cm触知する。

血液所見：赤血球340万、Hb10.2g/dL、Ht33%、白血球8,700(骨髄球3%、後骨髄球5%、好中球59%、好酸球4%、好塩基球2%、単球8%、リンパ球19%、赤芽球3個/100白血球、血小板35万。

血液生化学所見：総蛋白6.8g/dL、アルブミン3.8g/dL、総ビリルビン1.2mg/dL、AST36IU/L、ALT24IU/L、LD587IU/L(基準176~353)、尿素窒素22mg/dL、クレアチニン1.1mg/dL。骨髄穿刺ではdry tapで骨髄液を採取できなかった。

診断のために次に行うべき検査はどれか。

a 骨髄生検 b 骨髄MRI c 腹部超音波検査
d JAK2遺伝子検査 e 骨シンチグラフィ

試験後の自己採点で安心した人は、卒業後のハードな研修医生活の前に、長期旅行に行ったりすることも多いようです。

ところで、「医師免許ってマークシート試験で取れるの?」と思ったあなたは鋭い!基本的に医学部卒業(見込)でなければ受験資格はありませんが、国試自体は筆記試験のみなのです。そこで、後述の臨床研修につながってきます。

医師免許交付の手続

3月の中旬には国試の合格発表があります。

大抵は、通っている大学から説明がありますが、医師免許証は国試に合格しただけでは受け取れず、居住地(場合によっては勤務予定地)の最寄りの保健所で手続をしなければなりません。各保健所が書類を確認し、都道府県庁を經由して、厚生労働省の試験免許室という部署で処理され、手続から約2か月後に、手続をした保健所で医師免許証を受け取れます。手続に必要な収入印紙は5万円と、各種免許の中でも高額になっています。書類を持っていくときは気を付けましょう!

この手続により、厚生労働省に備えられた「医

籍」と呼ばれる名簿に登録され、公的に医師と認められます。（厚生労働省がインターネットで公開している「医師等資格確認検索システム」で登録があるかどうか確認できます。）

医師以外にも、歯科医師、薬剤師、看護師、診療放射線技師や理学療法士等、いろいろな医療関係職種の免許がありますが、医師免許の取得者は、薬剤師など殆ど全て（歯科など一部を除く）の医療関係職種の業務を行うことができます。

医師法では、犯罪や不正を行ったりした場合などに、医師免許を取り消されたり、一定期間の業務停止の処分がされたりします。また、有効期間はありません。

医師免許証は大きな賞状のような形で、紙質も良く立派なものですが、持ち運びや勤務先や役所に提出するためのコピーをとるのが大変という声も。

臨床研修（初期研修）

臨床研修は、初期研修や初期臨床研修とも呼ばれ、医師法では「診療に従事しようとする医師は、二年以上（中略）臨床研修を受けなければならない」とされています。国試は筆記試験のみで、実技試験はないので、実技については、免許取得以降に臨床研修以降、実地で磨いていかなければなりません。

臨床研修医は、病院実習の医学生と異なり、医師免許を持っており、技術的にはこれからとはいえ、一定水準の知識を得ていることから、医療行為が行えるので（医学生はダメ）、研修とはいえ、自ら実践しながら、臨床業務に従事する医師としての知識を向上させ、技術を修得していくこととなります。具体的には、内科など必須の診療科と選択した診療科を1か月～数か月ごとに替わりながら、各診療科の上司や先輩医師の指導を受けながら、外来や病棟、救急対応や当直等の仕事を体験します。

臨床研修を行う病院は、研修予定者本人の希望

により、6年生の夏までの臨床研修病院への訪問（就職活動のようなもの）を経て、「臨床研修マッチング」と呼ばれるインターネット上のシステムに希望病院を登録し（複数の登録が可能）、病院側の採用希望順と機械的に照合されて、10月末に決定されます。（注：自治医科大学や防衛医科大学の卒業者の臨床研修病院はあらかじめ指定されており選択できません。）なお、マッチングで希望病院に採用されなかった場合は、研修医定員に空きがある病院の二次募集に、個別に応募していくこととなります。

多くの学生は4年生～5年生から臨床研修病院選びを意識し、民間企業（レジナビフェア、e-レジフェアなどの名称）や大学主催の臨床研修病院説明会に参加したりしています。

山口県内には15の臨床研修病院があり、いずれも都市圏の病院に劣らない充実した指導体制と豊富な症例があり、どの大学の学生であっても、見学や相談を快く受け入れていますので、メールや電話で連絡した上で、実際に訪れてみるのがお勧めです。

山口大学医療人育成センター、山口県医師会、山口県医療政策課でも臨床研修に関する情報を提供しています。山口県が毎年作成している「臨床研修病院ガイドブック」も好評配布中です。送付御希望の方はお気軽にメールや電話でお知らせください！



また、山口県の委託を受けて県医師会が運営している「山口県医師臨床研修推進センター」のホームページでも臨床研修病院情報や民間企業の

研修病院説明会の出展情報等が入手できます。
 (「山口県臨床研修推進センター」で検索！)



専門研修（後期研修）

2年間の臨床研修が終わったら、多くの医師は専門の診療科への道を歩み始めます。(中には早くから基礎研究や行政に携わる人や大学院に進学する人もいます。)

現場で診療を行うに当たって、プロフェッショナルとして修練を行うため、専門研修（後期研修とも）を行うことが現在は主流となっています。臨床研修と異なり、法律による規定はなく、各診療領域（〇〇科といった診療科に対応）の学会が認定した各病院の研修を終えた医師は専門医の受験資格を得られます。

現在の仕組みは、各学会によるもので、統一的なものではなく、医師にとっても、患者にとっても分かりづらいものであることから、ここ数年、国や学会、日本専門医機構といった関係団体で検討が進められ、現在、平成30年には、共通の基準により、学会が審査を行い、日本専門医機構が認定を行うという仕組みに移行するための検討・準備が行われています。

この新たな仕組みの中で、地域に根付き、患者の抱える病気を包括的に診たり、在宅医療や予防にも幅広く携わったりする「総合診療専門医」の新設も予定されており、高齢化や医師の偏在を背景に、大きな期待が寄せられているところです。

専門研修に関する情報は、「やまぐちドクターネット（本誌 p12）」でも御紹介しています。



さて、「医師は生涯に渡って研鑽が求められる」と言われたりもしますが、ある程度の知識・技術を身に付けた専門研修後は、更なる能力向上に向けて修練をしながらも、医療チームのリーダー的立場として診療に当たったり、後進の助言・指導に当たったりする機会も増えてきます。中には、開業する人や臨床から離れて医師としての知識を活用する人、専門医療を極めようとする人、医療過疎の地域で診療に従事しようとする人もいることでしょう。医師の進路は臨床が中心ではありますが、行政や予防保健、研究や教育など様々な広がりを持つものです。

どのような医師になりたいか、何をする医師になりたいか、ということと皆さんの進路選択は密接に結びついています。

医師を志している皆さん、また医師になって間もない皆さんには、医師として活躍したいモチベーションは何に基づいているか、自分の関心や適性は何に向いているのか、自分にどのような可能性はあるかといったことを時折振り返りつつ、ぜひ、あなたの身近な人を、ふるさとの人たちを、広く地域や社会を支えてあげられる医師を目指してください。

私たちは、皆さんが山口県の医療を支える大きな柱となることを期待しています！

◆ 医師確保総合情報サイト「やまぐちドクターネット」

県のインターネットサイト『やまぐちドクターネット』では、県の医師確保対策をはじめ、地域医療に関するトピックスや県内医療機関の情報を掲載しています。

このサイト上で会員登録をいただいた方には、現場で活躍する女性医師や研修医の方々のエッセイ等を紹介するメールマガジン「やまぐちドクターネット通信」を隔月配信しています。

本誌のバックナンバーも掲載していますので、ぜひ一度ご覧ください。

⇒ <http://www.y-doctor.med.yamaguchi-u.ac.jp/>



◆ 地域医療に従事する医師を志す方への支援制度を設けています！

山口県では、地域医療を担う医師の育成のため、自治医科大学の運営費負担と医師修学資金の貸付けを行っています。各制度の詳細や応募方法については、山口県医療政策課へお尋ねください。

自治医科大学について

自治医科大学は、へき地等の医療の確保と向上を図るため、昭和47年に全国の都道府県が共同して設立した、地域医療を支える医師を養成する医科大学です。

山口県からは、毎年2～3人が入学し、現在、山口県出身の卒業医師は79人にのぼっており、へき地医療のほか、病院や大学、行政など、様々な分野の第一線で活躍しています。

< 修学資金貸与と返還免除 >

- 修学資金貸与
入学金・授業料・実験実習費・施設設備費の全額と入学時学業準備費40万円が入学者全員に修学資金として貸与されます。
- 返還免除
卒業後、山口県知事指定のへき地診療所等に医師として勤務した期間が、修学資金の貸与を受けた期間の1.5倍相当期間に達した場合は、修学資金全額の返還が免除されます。

< 入試情報 >

<p>第1次試験（学力試験・面接試験）</p> <p>期日：例年1月下旬（学力試験の翌日に面接試験）</p> <p>場所：山口県庁</p> <p>学力試験の科目：数学・理科・外国語</p>	<p>第2次試験（小論文・面接試験）</p> <p>期日：例年2月上旬</p> <p>場所：自治医科大学（栃木県下野市）</p>
--	--

山口県医師修学資金貸付制度について

《入学予定者・在学生対象の募集》 ★募集期間：平成29年3月下旬～5月下旬

区 分	特定診療科枠・外科枠	県外医学生支援枠
募集人数	7人程度	3人程度
貸付額	月額15万円	月額12万円
対象者 ア～ウを 全て 満たす者	ア (次のいずれかに該当) ①山口大学医学部に在籍する学生 ②山口県内の高校を卒業し、県外の大学医学部に在籍する学生 ③山口県外の高校を卒業し、山口県内に3年以上継続して在住する保護者を有し、県外の大学医学部に在籍する学生	(次のいずれかに該当) ①山口県内の高校を卒業し、県外の大学医学部に在籍する学生 ②山口県外の高校を卒業し、山口県内に3年以上継続して在住する保護者を有し、県外の大学医学部に在籍する学生
	イ	1年生～6年生
	ウ	大学卒業後、山口県内の公的医療機関等において、 <u>小児科、産婦人科、麻酔科、救急科、放射線治療科、病理診断科、呼吸器内科、外科</u> の医師として勤務しようとする学生
貸付けの条件	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大学を卒業した日から2年以内に医師免許を取得し、その後、直ちに臨床研修を開始しなければなりません。 ○ 臨床研修修了後、貸付期間の2倍に相当する期間に達するまでの間に、貸付期間の1.5倍に相当する期間、知事が指定する県内公的医療機関等において医師として（特定診療科枠・外科枠においては、当該診療科の医師として）業務に従事しなければなりません。 （県内の基幹型臨床研修病院が管理を行う臨床研修プログラムで実施された臨床研修期間については、貸付期間が5年以上の場合は2年、3年以上5年未満の場合は1年が業務に従事した期間として算入されます。） 	
返還免除要件	上記の「貸付けの条件」を全て満たした場合に、貸付金の全額（元本及び利息（単利10%））の返還を免除します。また、本人の死亡や心身の障害の場合に、全額又は一部の返還を免除することがあります。	

《大学入試枠との連動》 ★募集期間については各大学の募集要項を参照ください

区 分	地域医療再生枠	緊急医師確保対策枠
募集人数	10人（山口大学9人、鳥取大学1人）	5人（山口大学）
貸付額	月額15万円	月額20万円
対象者	山口大学医学部医学科推薦入試「地域医療再生枠（山口県枠）」及び鳥取大学医学部医学科一般入試「地域枠（山口県枠）」に合格した者全員	山口大学医学部医学科推薦入試「緊急医師確保対策枠」に合格した者全員
貸付けの条件	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大学を卒業した日から2年以内に医師免許を取得し、その後、直ちに臨床研修を開始しなければなりません。 ○ 臨床研修修了後、12年に達するまでの間に9年（緊急医師確保対策枠の場合、9年のうち4年は過疎地域の病院において）、知事が指定する県内公的医療機関等において医師として業務に従事しなければなりません。 （県内の基幹型臨床研修病院が管理を行う臨床研修プログラムで実施された臨床研修期間については、2年が業務に従事した期間として算入されます。） 	
返還免除要件	上記の「貸付けの条件」を全て満たした場合に、貸付金の全額（元本及び利息（単利10%））の返還を免除します。また、本人の死亡や心身の障害の場合に、全額又は一部の返還を免除することがあります。	

◆ 「地域医療の風だより」 継続発送の御案内

お送りいただいた情報は本誌の送付に関する用途以外には使用しません。

ファックスでのお申込み

申込書に御記入の上、ファックス番号 083-933-2829 にお送りください。

◆ 継続発送申込書

氏 名	(歳)
送付先住所	(〒 -)

Eメールでのお申込み

件名を「地域医療の風だより継続発送希望（医師確保対策班）」とし、申込者の氏名・年齢・送付先住所・郵便番号を記入して、メールアドレス a11700@pref.yamaguchi.lg.jp にお送りください。

岩国市の患者搬送船から望む柱島港



山口県健康福祉部医療政策課医師確保対策班

山口県へき地医療支援機構

〒753-8501 山口県山口市滝町1番1号

電 話 083-933-2937

Eメール a11700@pref.yamaguchi.lg.jp

<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a11700/index/>